



孤燈獨語錄

獨語子

▲過ぎし月の日曜に、日比谷の公園に遊んだ。四通八達の公園内の道路の、丸で人で織る様な中を、通り抜けて芝生の處まで来ると、さながら青毛氈を敷きつめた様な春の野邊、入口には「下駄足駄にて入るべからず」との高札がある。這入つて見ると此處も蒸す様な人数、多くの婦人達は皆下駄を手にして歩いて居る、ステツキに鼻緒を通して荷ひ歩く書生もある、と見て居ると、八字の鬚の

紳士ともつかず、書生ともつかぬ男の、男の子を引きつれたのが、つか／＼と下駄の儘大手を振つて通りかゝつた、すると、目を八方に配つて居つた番人は、いきなり「申し／＼下駄の儘ではいけませんぬ」と叫んだ、男は馬耳東風の様をよそうて行つ過ぎる、「あなた分りませぬか」追つかけさまに番人が迫る、尙無言の儘、急ぎ足に行くを、此方は前に立ち塞がつて「分らないのですか」と繰り返すや否や、彼の男「分らないわッ」と一言、鐵拳を振つて衝き退けながら、ぶん／＼通り抜け様として居た、如何に結局せしか其後は知らねど、戦勝國の公徳は、もつと高かるべき筈と感じたるもの、果た獨語子一人のみではなかつたらう。

▲同じ日、同じ場所にて四歳位とも思はれる男の子の、身形も卑しくなさ相なのが、父に離れたの

か、母にはぐれたのか、群集の中を、聲を限りに泣きながら、右に左に漂歩いて居る、例令ば親を失つた雛鳥の様にもある。女子供が集つてくる、餘計に泣き出す。誰と来たの？と尋ねても無論分らず、みな／＼途方にくれて何ともし様なくて居る中、番人が来て連れて行つた、多分は交番へ。子供をつれて遊びに来ながら、自分の奥に浮かればか、あらぬか、兎に角可愛き者を人込の中にはぐれさせるとは、いさてもさま／＼の世の親心とは、誰しも思ひ浮んだであらふ。

▲東京の女學生に情死せしものあり、京都の女學生に墮落せしものあり、社會はこの罪を教育者のみに責め様とするが、人を教育する力は學校と社會と家庭との三つの中、何れが果して一番強いかわれない、否な少くとも青年時代に於ける、社會

の感化の力が非常なのは事實の様だ、して見ると、此の如き學生を出した社會がこれに向つて、眞先に責を負ふべきである。

▲我同胞幾多の將卒が、陸に海に肉を劈き血を流しつゝある間に、東都の劇場は相競争て、今様劇を催し、觀客に男女學生最も多いとは、何といふ現象であらう。まさか、學校が此現象を教育し出したのだともいはれまい。

▲可笑しいのは、雑誌記者の處へ、自分の家の收入を報知して、自家の會計を立て、貰ふ人の心である。立てる方では机の上の空論だから、どんなに家族が多くつて収入少くとも、如何様にも立て得ることが出来る、が、空論から割り出した此會計法が果して實地に間に合ふであらふか、現在局に當つて居る家の主婦ですら出来ない會計か、何

て五十里百里隔たつた東京の人の手に出来ようか
 更に又自分の家の暮し向きをあかの他人に立て、
 貫はねばならぬといふは、何といふ意氣地のない
 主婦であらうか、とは平生から考へて居た所だが
 近頃の六合雑誌にも同じ様な意味の論説が見えた
 ▲収入の十分の一乃至八分の一を以て家賃に當て
 よといふ原則は、少くとも今日の東京に於ては出
 來ぬ相談である。五十圓の収入の人の棲むべき、
 五圓乃至六圓の家は金の跬で尋ねても見當るもの
 でない。敢て家主の肩を持つのでないが、今日の
 家政を考へる人は家賃に向つて餘り制限し過ぎる
 でないか、十五圓とか二十圓とか纏めて出すから
 多すぎる様に思ふのだが、家族の一人前に分つて
 見ると大低は月に二三圓に當る、夫で以て雨露を
 凌ぎ、疲を醫し、樂しき家庭を造つて行かれるこ

とを思へば、家賃をたい捨てる様に思ふのは間違
 つて居る、家賃は食費と同じ位に出しても宜から
 うと思ふ。

▲別して女の「ハイ」Yesといふ言葉には裏がある
 心では随分「否」Noであつても、大低までは「ハイ」
 といつて仕舞ふ。殊に目上に向ては、よくの
 場合でなくては「否」Noとは言ひ得ぬものである。

故に婦人を職員として使ふ人は、たゞ「ハイ」Yesと
 いつたからとて、自分の意見が心から賛成せられ
 たものと思つて、どしどし實行しては、随分酷な
 ことにもなるものである。

愚 感 一 束

相州國分寺の傍 平 岩 繁 治
 ▲品川より見送りの人に別れて瀛車の中に飛び込